山梨大学教育人間科学部と附属４校園との連携に関する研究Ⅰ

On the Study of Ideal Collaborative Ways of their Researches and Practices between the Faculty of Education and Human Sciences of University of Yamanashi and its Attached Schools（Part 1）

鳥海順子*　古家貴雄**　谷口明子***

Junko TORIUMI　Takao FURUYA　Akiko TANIGUCHI

角田　修***　長谷部美佐子****　山本英寿*****

Osamu TSUNODA　Misako HASEBE　Hidetoshi YAMAMOTO

石井　敬******　手塚雅仁*******　青木洋子*******

Takashi ISHII　Masahito TEZUKA　Yoko AOKI

澤登義洋********　望月之美*********　泉　晋一**********

Yoshihiro SAWANOBORI　Yukimi MOCHIZUKI　Shinichi IZUMI

Ⅰ　はじめに

本稿は、大学と附属４校園の研究連携を目的として成立した新共同研究会の平成１７年から過去５ヵ年の研究の経過と成果を報告するものである。まず、本研究会は、前述のとおり平成１７年に成立したものだが、それ以前は実践教育運営委員会の傘下にあり、報告書等の発刊をする事業を行なっていた。その後、共同研究会は解消され、大学からは当時教育実践総合センターの鳥海、澤登、実践教育運営委員会の古家（英語教育講座）、附属４校園からは教務主任と研究主任後に、教育実習主任というメンバーで新共同研究会の名前で新たに発足した。研究会の目的は前述したとおり、大学と附属４校園の連携を目的とした共同研究の計画と実施と成果の報告、一般的な教育に関する情報交換（それには学習指導要領や文部科学省の新たな方針についての議論が含まれた）、さらには、その他、教育実習に関する連絡事項の伝達などが挙げられた。研究会は年６回附属４校園の主任会議の後におおよそ１時間くらいの時間開催された。大学と附属４校園の教員の間で、いろいろなトピックスについて忌憚のない率直な意見のやり取りがあり、共通の関心を追求するという意味で大変有意義な時間であったと思う。なお、平成２０年度より、大学の研究員の中で特任教授の任期終了に伴って澤登から角田に代わり、鳥海が障害児教育講座に移籍したため、教育実践総合センターに着任した谷口が加わった。

Ⅱ　附属４校園と大学との連携の今日的問題

本来、大学とその附属学校とは、大学で研究された教育理論や理念を附属学校の教育に反映させ、また大学での研究や理論を通して附属学校で行なわれた教育実践を基にして、それらの研究・理論の妥当性を検証する、という関係性で成り立つとされている。例えば、英語教育の場合は明治期に、東

*障害児教育講座　**英語教育講座　***附属教育実践総合センター　****附属幼稚園　******附属小学校
******附属中学校　*******附属特別支援学校　********南アルプス市教育委員会（前附属教育実践総合センター）
*********甲府市立山城小学校（前附属小学校）　**********甲府市立上条中学校（前附属中学校）

京高等師範学校教授の岡倉由三郎が、ドイツに派遣されて研究してきた音声主体の英語教育を附属学校で実践させ、さらに直接本人が附属中学に乗り込んで自身で授業を行なったという記録もある（伊村, 1973)。そしてまた、附属学校で検証され、効果があるとされた教育方法論がその地域の教育機関の実践のモデルになることが期待された。しかしながら、今日ではそのような関係性はほぼ忘れられ、大学と附属学校の関係性は希薄になる傾向にあった。また、研究実践を附属学校が独自に実施し、あまり大学と連携を持たないという傾向もあった。附属学校と大学とが有機的に機能していないということが最近問題となり、文部科学省から両者のより良い連携の模索とともに、協同研究の推進や促進が各国立大学に通達された。

Ⅲ　本学における附属４校園と大学との関係

以上のような傾向に対して、本学の場合は、これまで附属学校と大学がかなり有機的な関係を保ってきたと言えると思う。例えば、本学部では、平成１１年学部改組を経て実践教育運営委員会を組織し、学部、附属４校園、教育実践総合センター３者が連携し、教育現場、地域社会に具体的に貢献する体制を強化した。そのため、平成１２年２月に、附属４校園と協力して附属４校園独自の「生き方」に関するカリキュラムを共同開発する「合同研究会」と、既に附属校で着手されていた「総合的な学習の時間」の研究を相互に情報を共有しながら進める「共同研究会」を発足させた。それぞれの研究課題については、合同研究会が平成１４年１０月に『「生き方」に関する４校園の間の連携カリキュラム開発プロジェクト研究成果報告書－幼・小・中・養護学校間の交流教育を通して－』に、共同研究会が平成１５年７月に『「総合的な学習の時間」のあり方に関する研究報告書－教育人間科学部・附属小・中・養護学校の連携を通して－』（山梨大学教育人間科学部共同研究会, 2003）にまとめ、山梨県内の学校に配布した。平成１６年度は研究会から一応の成果が出されたこともあり、今後の研究会のあり方について、当時の実践教育運営委員会古家委員長を中心に附属４校園と大学の研究員とが検討を重ね、新共同研究会の発足に至った（鳥海, 2005)。この経緯については「Ⅳ　新共同研究会の研究活動の内容とその経過について」において触れる。その他の連携としては、大学の研究成果の一部が附属学校で実践されたり、大学のスタッフが附属学校に出向いて教科指導的アドバイスをしたり、公開研究会などにおいては研究の中身や授業公開における指導助言という意味で、両者は絶えず協力関係にあった。これらについては「Ⅴ　附属４校園と大学のこれまでの連携内容について」において報告する。以上のようにこれまでも連携は行われてきたが、大学と附属学校が対等な関係で、理論と実践の関係を共同プロジェクトとして実施するというケースは本学でも少なかったのではないかと思う。これから、さらに両者の有効な連携関係は強化されるべきであるし、そのため本新共同研究会は有益な存在に成り得ると思う。

Ⅳ　新共同研究会の研究活動の内容とその経過について

本研究会の発足以降５年間に議論、提案が行われた研究テーマと内容は以下の項目であった。

１．研究テーマ

平成１７年度「附属４校園と大学との連携の実態について」

平成１８年度「附属４校園と大学の組織的連携方法の研究と実践」

平成１９年度～平成２１年度「教育実習における附属４校園と大学との連携―学生の意識を高めるためにー」

２．研究内容

①これまでの大学と附属４校園との連携の実績の洗い出し。まず、研究会として、大学と４校園の理想的な連携や提携の在り方を議論すべきとの意見が研究員の間から出た。そこで、これまでどのよ

うな連携が大学と附属４校園で行なわれてきたのかが発表・検討された。それらには、４校園から大学への協力として、大学の研究に関する附属４校園の協力、大学から４校園への協力として、教科指導に関する指導助言、教育相談、公開研究会での指導・助言、あるいは学生補助の協力、ＰＴＡ研修会での講演、授業での協力（総合的な学習の時間へのアドバイス、国際交流への協力）、校内研究会でのアドバイス、学生チューターの派遣への協力などがあった。

なお、以上、これまで積極的に大学と４校園との間の連携は行なわれてきて、附属４校園の側でこれからもこれを継続したいと思うが、大学に何かを依頼する場合、窓口がバラバラであるため、相互交流のためそれを一本化してほしいとの要請があった。そこで、大学の各種委員会の担当者を毎年附属４校園側に提示するということが行なわれるようになった。

②附属学校やその研究をさらに世間に広く公表するために、学部ではなく、大学全体のホームページのトップページから附属４校園のホームページにリンクできるようにしてもらえないかとの要請。これについては、大学のトップページに掲載できる情報量の制限の問題から困難であるが、附属４校園の公開研究会の情報については、要請さえあれば、定期的に掲載できる旨の回答が大学担当部署からあった。

③教育実習生の質に関する議論。現在は、教育実習について事前・事後指導が充実し、問題がある実習生が附属４校園で見られるということはあまりなくなったということであるが、それ以前は、大学の研究員に対して附属４校園の研究員から実習生の質について厳しい実態報告があった。平成１８年には、「最近、附属学校に送り込まれてくる実習生に教師になろうとする意識の甚だしく低い学生がいる。卒業要件として教員免許の取得を全員に要求しないで、意識の低い学生は教員免許を取らなくても他の授業単位で代替でき、それによって卒業できるシステムを作るべきではないのか」のようなコメントが附属学校の研究員より出された。

④今後の本研究会での大学と４校園の共同研究に関する議論。最終的に、より質の高い、また教育意識の高い教育実習生を育てるために大学と附属学校とがどのような協力関係を築けるかを研究すべきだとの結論に至った。そこで、「教育実習を行なう学生にどのような手立てや指導方法を使って、教師という職業意識や使命感を育てていくべきか」を共同テーマとして共同研究を行なっていくことになった。

以上のテーマに基づいて研究を推進していくことになった。ついては、附属４校園で実習を行なった学生とその担当者について、実習に関する意識を問うアンケート調査を行なってはどうかとの提案があり、研究会としてまずこの研究に着手した。平成２０年度にパイロット調査を行い、平成２１年度に本調査を実施した。その結果は今後、研究紀要で順次発表していく予定である。例えば、附属４校園での実習を経験した学生への調査項目例としては、１．実習前・後の教師志望意識の変化、２．実習の意義･意味、３．実習前の不安、４．実習前の子どもの指導経験、５．実習での実際の困難、６．もっとつけておくべきだったと思う資質･能力、７．指導教員から学んだこと、８．指導上注意を受けた点、９．誉められた点、１０．子ども達との人間関係、１１．担当時間、１２．研究授業･研究会での学び、１３．授業計画時の困難、１４．教師としての適性、１５．人間的成長の確認、１６．大学で指導しておいてほしかった点、１７．より努力すべきこと、などがあった。

⑤附属４校園への学生ボランティア受け入れの意義。これは、特に附属特別支援学校の青木研究員よりの報告であったが、附属特別支援学校では毎年、主に障害児教育専修の学生を学生ボランティアとして受け入れており、同氏より当プロジェクトが学校システムや生徒理解に非常に効果を発揮している旨の報告と提言が「平成１８年度学生ボランティア受け入れの成果と課題」としてあった。この中で、実際のボランティアを通して、同じ学生と年を越えて継続的に交流し、次第に仕事に責任を与えることで、彼らの責任感が養われ、徐々に教師という職業の面白さや使命感が彼らの中に現れると

いう実感が持てるようになったと述べられ、また、教師の方も学生の扱い方を学べるということで双方にとってメリットがあるとも報告された。そこで、この報告の後、附属４校園から積極的にボランティア委員会にボランティアの必要性を要請していこうということになった。

⑥本学学生の全学年が附属４校園の公開研究会に参加するように、附属の公開研究会の案内をＣＮＳ（電子掲示板）に掲示すること。いきなり３年次教育実習で附属学校に初めて関わるのではなく、１年生から附属学校に馴染ませ、子どもの気質や学校の様子やシステムに慣れてもらう方が良いのではないかとの意見が研究員の中にあったので、平成２１年からそれを実施している。実際に、本年６月に「附属学校の公開研究会に参加しよう！」という項目で附属４校園の公開研究会の日程と内容、また参加上の注意点をＣＮＳに掲示した。つまり、学生を日頃より附属学校の行事に関わらせることで、学校とはどういうところかが実習までに理解でき、また、学校との関係を実習以後も継続していくことができる。そうすれば生徒の扱い方もわかるようになるだろうとの意図があるわけである。

⑦実習アーカイブの作成。実習生の実習体験を残して管理し、後輩の実習生のための参考にする実習体験データベースが本学にはない。そこで、実習の実習体験を綴った文書を実習経験者に実習後すぐ書かせ、教育実践総合センターに「実習アーカイブ」として保管していったらどうだろうかという提案がされた。もちろん文章だけでなく映像の保管も有益である。現在「授業分析論」という授業もあるので、現実味はあるのではないかという意見も出た。

以上、本研究会のこれまでの経過を述べたが、今後は、教育実習に関わる実習生と指導教員についてのアンケート調査の分析と結果の公表を行い、大学ではどういう素養と意識とをつけて実習先に学生を送り込み、附属学校ではそれらの能力や意識をどのように高めていったら良いか共に考えていければいいと思っている。また、各４校園でも実習後のアンケートはやっているが一般的な項目のため、本アンケート調査では学生の実習に対する本音を知りたいとのニーズが附属４校園の研究員から出された。この達成も本アンケート調査の目的の１つである。今後、この情報を基にして両者のより良い連携の在り方を模索していきたいと考えている。

Ⅴ　附属４校園と大学のこれまでの連携内容について

附属４校園と大学との連携について洗い出しを行うために、附属４校園の研究員が具体的な連携内容について過去１～３年の記録簿を作成した。なお、連携内容の中には現在継続されているものもあるが、そうでないものも含まれる。連携内容は、「授業（保育）」、「課外活動」、「教育実習」、「公開研究会」、「教員研修やPTA研修」、「教育相談」の項目に分類することができた。「授業（保育）」については、大学からの要請によって附属４校園が大学の授業に協力する場合と、逆に附属４校園の要請により大学が附属４校園の授業（保育）に協力する場合の両者が記載されている。なお、（　）内は特に連携している附属校園、（共）はすべてに共通したものを示す。

１．連携内容

①　授業（保育）に関する連携

・　大学の授業で取り組んだ人形劇を園児の前で発表する（幼）。
・　大学の授業の一環として幼稚園における幼児や環境についての観察を行っている（幼）。
・　保健体育講座で行う運動能力検査に協力している（幼）。
・　教科教育を中心とした大学の講義の一部を附属校の教員が担当する（小中）。
・　大学の授業として障害児教育講座の学生との交流や附属特別支援学校の授業を見学する（特）。
・　学生が教育ボランティアとして、研究の補助、行事などの取り組みに協力する（共）。
・　総合的な学習の時間に大学教員がアドバイザーとして関わったり、留学生が「国際交流」の領域で協力したりしたことがある（中）。

・　子ども図書室，大学生協など大学の施設を附属特別支援学校の各学部の授業で活用する（特)。
・　大学プールを附属特別支援学校高等部「体育」の授業で利用する（特)。
・　附属特別支援学校高等部「音楽」の授業で，音楽教育講座の学生の楽器演奏や歌唱を鑑賞する(特)。

②　課外活動に関する連携
・　保健体育教育講座で行う「幼児キャンプ」に年長児（希望者）が参加している（幼)。
・　公開講座で行う「サッカー教室」「柔道教室」に希望者が参加している（幼)。
・　学生が教育ボランティアとして自然教室や通学路監視員を担当する（小）

③　教育実習に関する連携
・　教育実習の実習校として実習生の指導を行っている（共)。
・　特別支援教育特別専攻科の実習校として実習生の指導を行っている（特）
・　養護教諭実習校として実習生の指導を行っている（共、特に幼・特)。
・　介護等体験実習として実習生の指導を行っている（特)。
・　応用教育実習の実習校として意欲ある実習生の指導を行っている（共)。
・　幼児教育講座の学生が継続的に観察実習を行っている（幼)。
・　実習の事前指導（大学の授業「授業設計論」）で校種別の指導を担当している（共)。
・　養護教諭養成に関する大学の授業「養護教諭実践論」で指導している（幼)。
・　実習の内容について、幼児教育講座の先生方と協議しながら検討し、指導している（幼)。
・　実習の事前指導（「授業設計論」）で「指導案の作成と模擬授業グループワーク」を担当している（小中)。
・　実習生の研究授業で大学教員が指導・助言を行っている（共)。

④　公開研究会に関する連携
・　幼児教育講座の大学教員との共同研究を行った（幼)。
・　大学教員が講演講師や助言者として協力する（共)。
・　公開研究会の方向性、公開授業について大学教員がサポートする（中)。
・　障害児教育講座の学生がポスター発表に発表者として参加し、卒論や修論等研究の紹介をする(特)。
・　大学教員が公開研究会への学生の参加を促す（共)。

⑤　附属４校園の教員研修やＰＴＡ研修に関する連携
・　県内外の研修会として附属が実施している公開学習会で講師として協力する（幼)。
・　大学教員が研究会や研修会、学習会の講師として協力する（共)。
・　附属教育実践総合センターと特別支援教育基礎研修を共催し、校内研修にも活用している（特)。

⑥　附属４校園の教育相談に関する連携
・　大学主催の「教育相談室連絡協議会」に教育相談担当者が出席し、情報交換や指導、助言を受けている（共)。
・　児童・生徒、教員、保護者の教育相談を大学教員（附属スクールカウンセラー）が担当している（共)。

⑦　その他
・　学生の卒論や修論に協力している（共)。

２．大学との連携に関する研究員からの意見
・　附属４校園と大学との連携におけるグランドデザイン（目標，求める連携像，連携の方向性など）が明確にあり，それに沿って研究など附属４校園と大学が一つの方向（目標）に向かって連

携を推進することも一つの方法だと思う。これからも，大学との話し合いの機会を設け，連携内容において改善点を明らかにしながら，連携をさらに推進していきたい。

- 大学の教育資源（人的・物的）を授業などに活用することも大切だと思う。
- 様々な面で附属４校園と大学とが以前より連携を意識していると思う。(特に、教育実習や公開研究会)
- 実習については、先生方が学生に求めるものと学生の意識とのギャップをどう埋めていくかが課題である。実習中だけのかかわりにならないように、公開研究会への学生参加をさらに促し、そこからも教師としての姿勢や授業の組み立てなどを学び取ってもらいたい。
- 学生ボランティアに対する教師側（附属４校園）の共通理解を図り、それを有効に活用することを通して学生が得意とする分野で長所や利点を引き出していくことも視野に入れていくことが必要と考えている。
- 学校と大学が隣接しているという好条件を生かし更に連携を深めていきたい。大学との共同研究による授業実践や学生との交流の充実など，附属学校ならではの実践，研究に取り組み，それを学校の特色としていきたい。

Ⅵ　実習生に対する調査研究

１．予備調査

新共同研究会で検討し、作成した学生用の調査票案についての予備調査を行い、質問項目と形式について検討した。

（１）予備調査対象：平成１９年度特別支援教育特別専攻科９名（回収率：対象者９名のうち、８名分回収。回収率88.9%）

（２）調査結果:予備調査をもとに、下記のような【フェイスシート】および【実習前】【実習中】【実習後】の合計21項目について、自由記述形式で回答を求める調査票を完成させた。以下にその内容を示す。

【フェイスシート】：学校名、配属された学年、実習生の属性について選択および記述の形式とする。

【実習前について】

① あなたは将来教師になりたいと思っていましたか。(はい・いいえ)
② 自分にとっての教育実習の意義とは何だと思いますか。
③ 実習前に不安に感じていたことは何でしたか。
④ 子どもを指導した経験はありましたか（教育ボランティアなど）(はい・いいえ)) (　　回)

【実習中について】

⑤ 実習において実際に困難点を感じたことはどのようなことでしたか。
⑥ 実習を経験して、もっとつけておくべきだと思った能力はどのようなものでしたか。
⑦ 実習校の指導教員からどんなことを学びましたか。
⑧ 実習校の指導教員に指導された点、注意を受けた点、評価された点はどのようなことでしたか。
⑨ 子どもたちとの人間関係はうまく築けましたか。
⑩ 実習での担当授業時間はどれくらいでしたか。
⑪ 研究授業を行ったり、研究会に参加したりして、どのようなことを学びましたか。
⑫ 同学年・同クラス・同教科の実習生とどのように協力し合いましたか。
⑬ 授業のプランづくりのときに、最も参考になったことは何ですか。
⑭ 授業の計画を立てる際に難しいと思ったことは何でしたか。

【実習後について】

⑮ 実習を通して、自己の教師に対する適性を確認できましたか。

⑯　実習を終えて人間的に成長できた点とは具体的にどういう点でしたか。
⑰　実習を行ってみて、もっと大学で指導しておいて欲しかった点はどのような点ですか。
⑱　実習によって、自己の教育観、教師観は何か変化しましたか。
⑲　実習を終えて、より良い教師を目指すために、今後、より努力すべきことは何ですか。
⑳　あなたは、実習を通して将来教師になりたいと思いましたか。（はい・いいえ）
㉑　教育実習について全体的な感想を書いてください。

２．本調査

予備調査で作成した調査票を小中学校の前期教育実習終了後、学生に対して実施した。

（１）調査対象：平成２０年度の小中学校教育実習履修者８６名
（２）回収率：対象者８６名のうち、３４名分回収。回収率39.6%
（３）調査日：平成２０年７月２４日～７月２５日
（４）調査結果：紙面の都合上、以下結果においては質問項目の一部を省略して報告する。

【実習前・中についての質問】（　　）内は人数を示す。

①　実習前については82.4%（28）が教師を志望し、残りの実習生（6）は志望していなかった。
②　教育実習の意義は、図１のように実践現場や教師の仕事を知り、現場経験をし、適性を知る機会と回答していた。
③　教育実習前の指導経験は15名がもっていたが、回数は1回から多数回まで多様であった。
④　実習前の不安、⑤実習中の困難、⑥さらにつけておくべき能力についての回答を表１にまとめた。授業づくりや子どもとの関係づくりなどに関する内容が多かった。
⑦　実習指導教員からの学びを表２に示した。学生の学びは指導教員が実習生につけてほしい内容を反映している。

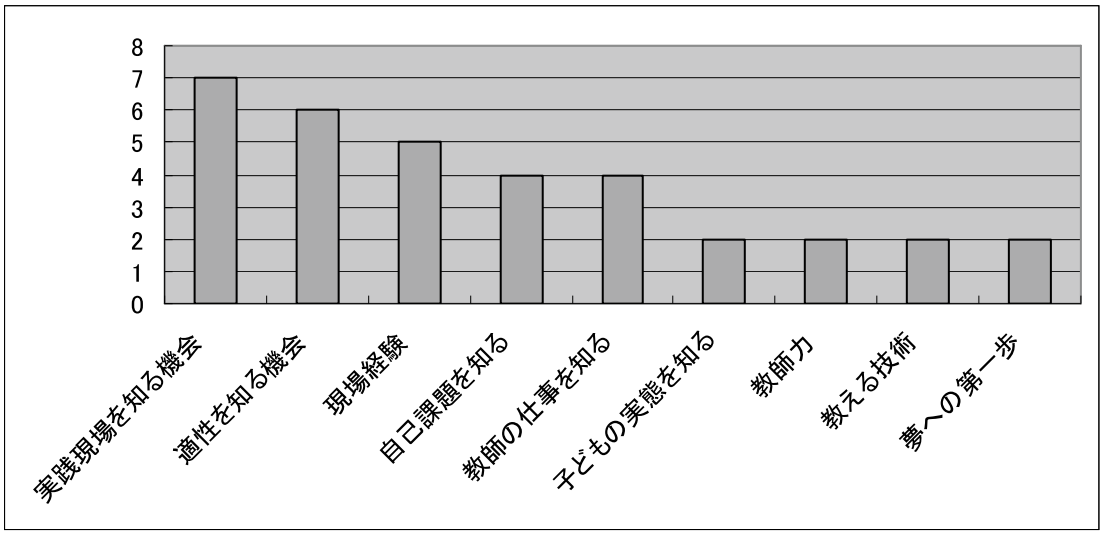

図１．教育実習の意義（縦軸は人数）

【実習後について】

⑨　自己の教師に対する適性は８割以上（28）の学生が確認できていたが、「確認できたが、勉強が必要だと思った」「迷いが増えた」「難しい仕事」という自由記述もあった。
⑩　人間的に成長できた点には「良いところをみつけ褒めること(3)」「多くの人とのコミュニケーショ

表１.「教育実習前の不安」・「教育実習中の困難」・「つけておくべき能力」

教育実習前の不安	人数	教育実習中の困難	人数	つけておくべき能力	人数
授業	12	指導案	6	教科の知識	8
子どもとうまく関われるか	8	子どもとの接し方	5	スピーチ力	6
子どもとのコミュニケーション	5	子どもに注意すること	5	授業力	4
子どもの前で話せるか	4	教育実習録を書く時間	4	多様な知識	4
睡眠不足	4	コミュニケーション	4	指導案	4
教師としての立場	2	子ども理解	3	板書	3
指導案	2	発問	2	指導力	3
体力	2	授業の工夫	2	事務処理能力	2
		時間配分	2	文章力	2
		人間関係	2	体力	2
				とっさの質問への応答	2

表２．指導教員からの学び

指導教員からの学び	人数
子どもとの接し方	5
授業づくり	4
子ども主体の授業	3
教師と生徒との関係	3
教材研究	3
教師とは何か	2
教師のやりがい	2
教師としての態度	2
けじめの大切さ	2
教師としての態度	2

ン（2)」「相手の話を素直に聞く（2)」「チームワーク（1)」「臨機応変さ（1)」など多様な意見に分かれた。

⑪　もっと大学で指導しておいて欲しかった点として「指導案（7)」「模擬授業（5)」「授業力（3)」「発問（2)」などが挙げられた。

⑫　自己の教育観、教師観は８割以上（29）が変化したと答え、「教師は模範となり、子どもと信頼関係を築かねばならない (2)」「児童主体 (2)」「教壇に立つ責任の重さ (1)」などの自由記述があった。

⑲　より良い教師を目指すために今後一層努力すべきことの上位３位は、「多様な知識（5)」「子どもともっと関わる（4)」「指導力（3)」「教科の知識（3)」であった。

⑳　実習後の教師志望は73.5%（25）と実習前（82.4%）より減り、いいえ（5)、わからない（3)、無記入（1）であった。

㉑　教育実習についての全体的な感想の上位３位は、「とても有意義で大変勉強になった。(17)」「始まる前は不安だったが、楽しかった（5)」「貴重な体験（2)」「自分に不足しているところがわかっ

た（2)」であった。

Ⅶ　研究の考察

実習生は、教育実習を「現場経験を通して、学校や教師の仕事、子どもの実態を知り、自分の教師としての適性を確認し、自己課題を見つける機会」として捉えている。授業を行うために必要な基本的な力や児童生徒と関わる力が備わっていない現実を知る機会となっており、その内容は多岐に渡っている。そのような現実の中で多くの実習生は、熱意と誠実さによって教育実習に取り組んでいるものと考えられる。実習前に比べて、実習後の教員志望者がやや減少し、実習前には存在しなかった「わからない」「無記入」とした回答が新たに加わったことも、実習を通して教師に求められる多様な力量と自己の能力の現実との落差を実感した学生の正直な思いの反映ではないかと思われる。今後は、教育実習指導教員にも調査を実施し、学生の結果との比較検討を行う必要があろう。また、前期教育実習で明らかになった実習生の自己課題を省察し、改善を行う機会として、後期教育実習の役割も大きい。現在、前期のみの調査であるが、今後、後期の教育実習終了後に同様な調査を実施し、比較検討することも行ってみたい。また、回収率が低かったのは、すべて自由記述であったことも原因のひとつと考えられる。今回の結果をもとに、回答方式を自由記述から選択肢方式に変更し、学生の回答への負担軽減を図りたい。

Ⅷ　おわりに

平成12年２月に共同研究会として開始された研究が、細々とではあるが平成17年度より新共同研究会に引き継がれ、教育人間科学部、附属教育実践総合センター、附属４校園と連携した協同研究として継続されてきた。新共同研究会の研究テーマとしては、附属４校園のニーズに即しており、現場の改善に役立つもの、今日的な教育課題であり、魅力ある学校づくりにつながるもの、大学の研究とも関連するものなどの方向性が論議されてきた。教育実習は教員養成学部である大学と教育実習校である附属４校園に共通する重要課題であり、新共同研究における重要課題として今後とも継続して取り組んでいきたい。

引用文献

1)伊村元道(1973)東京高等師範学校附属中学校英語科史稿.東京教育大学附属中学校研究紀要,22・23合併号,pp23-29.

2)鳥海順子(2005)合同研究会、共同研究会について.山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センターニュース,13号,pp7.

3)山梨大学教育人間科学部共同研究会(2003)「総合的な学習の時間」のあり方に関する研究報告書－教育人間科学部・附属小・中・養護学校の連携を通して－.共同研究会研究成果報告書.